宇治拾遺物語　六

共八

寛政拾遺図書下知十二月録

一海賊ゆつミうん出家の事　一きとゝ事

一保捕盗人たちの事　一時鳥を試ル事

一時鳥の色形を殺す事

一河内守松信事忠恒をせびら事

一白川法皇小面文殻のくゝりつけの事

一荒人得業猿ゝしの法ゝ事

一清水寺仏像ゝ事　一則光盗人をきらう事

一寺入れ去ゝ儀事

一日荒上人吉野山にて異ゝ事

一丹波守ゝ去ゝ下向の時致強文にあゝ事

一お家功績事　一建暦天皇僧乃行みつる事
一堀川井樹井許る事　一慈恵僧正文戒の因縁引のる事
一内記上人法師陰陽師誠冠被る事
一指貫袴穀文効給る事
一宮や上人臂観音院僧正行状をる事
一清賀上人三条宮文る事　一振旅事
一宣旨僧正一条大路をつくる事
一穀断ひる事　一すもをかねる事
一木あるを小童浸ぶる事　一ものの事
一ものの恐ぶる事　一つる拾ふる事

わが拾遺物語下巻二
今昔物語国ものみ
うちしてありけるの人海賊をあひしたりと
物語をつくりてそのいとわのくつ
ものをまことのものくそのつ
りの食物をあさみちてのを海をうつして
をもてるり淡路の六市はいとくしやうんひ
うれを安芸の鴻とそうとあもあるをよ
船一艘ちくあれをうをれを出六位の男八き
うけなるうをとおをくそのおきくわりき男
二三人うををうてをつふ四さくハ女とりの

主人母をとらへくとさまたてゝ水に入れすてゝのとをれ
さうなやうなる海をたゞくとこぎしていもとく
よろのものをみなとるべき我命のうきこゝを
をたすけ給へきやうるおひたる親のうれをそ
見つゝひてか一なみたとやゝれしらる涙のつる
てけをるほうのけしれをうえまうりのかるや
ちとをいひあるてわきこしめ紙みわちをしをを
すらさ海のうこれくおいをせられいれとと
くとくをゆるめ紙みうをせて立ちまるふ所人
やとくいうこうれるひゆうるおかくこうをも
さひひくいうくをもと思ふすて海ゆきつやうく

の上なる女はすてひろ所かく僧の強盗くひはうの
てうろひろ強なとけろをとりてうをるうらへつ
時なるもちとひして強盗をとるて水のうへすり
ひなうるをさうのくうれ強をさくりくうき
りくくすうとれるけうれけ師め今まてちかぬ
とて水のひしてうらをつくとうせなう紙
つさうきるくすれとうきりくこれいうめ強
とけくそわやとをひてうくうをこれ僧の水
かりひたう近下くくりるうくりるう童れひ
つくゆひくうの白きすへをりうさう二三人計
ひへ色僧のものうかてかうあ一人も強をりくりた

ろうい受戒とうへいちをみる四ツくへの物ともは
あまみよこれ僧はつきさるまちへへなれろと
ゆ色をいつ〳〵ゆるる人まりと以ゆまる用ゆ
をそうゆふ見色これ童やうひてあへて海まろわ
ひうとまうう〳〵ひてゆりあやーそれみんと思ひ
てこれはとるをはきてこことてさうをゆーやりられ
をこるをつきさるを引らせなきを人くなとうくを
すうろうまりまきまるとゆ色とさうれあの僧
ひうをえ、あんとてうあ永まのをりちくなれをは
まうをへをつへをこれ僧うりとふ我を京の人の
ゆりこへなをすうゆやとへをゆ中の仏徒師

まうりて人ゆ受戒をを仕らゆハゆうくきやう
ゆのうまて受戒せんをやーしゆをいきわまる
くて山ろうるをうろ人氏ろまやつまくをさ
をんとはしゆのをまゆるのりつふまりとゆ人
わ僧氏ゆやうひゆゆゆ取つふまりつふ兒をハたそ
るふうをうをゆ光のをうりのゆつふをうう
ゆほをすすといへをそを強さくをたりゆうひか
まをまるへうひたをつふハうもくくなふと思ひ
てをくゆ志ゆれをるまるこれをやうゆくろをを
ゆくゆ氏をとくへうを氏なんすうを三ひゆうゆた
をゆ食をゆくもゆくすゆ我ををゆとをきやうを

[illegible]
[illegible]
くそうのみもなくなりやうまてさくのくを
られのうひ作遣ハ山海珍味ハ[illegible]とこう志ゐへ
きひうすもなりうこれ作遣分りけさせ猪もんをう
遣しきるとく法ハ山海産門ハ猪なるひまもあを
まるたうこうハ[illegible]してあきこりの國へ渡らんとや
思ふ又きやうるのかるをて志ゆのいと要んとの山
めうをくらんといへハ志ゆのいれひも命
はのうひたく渡りのうひなんとい色をこれより
ほ[illegible]やるをてとひさくもうつ[illegible]るをつ[illegible]重戸

をおすゝうのくみくつ[illegible]とうをまれこれ僧侶る
さうとくおりしてほろくなりの西七ひうの作華経
よこをりてはこうをしくなりの[illegible]きう
まくすをとうををりれうこ十座をりれおりしの
新ようとうのよこ氏經座門ハ[illegible]なるををく
ひくをこ仏法をものくくうとくだくくをを酒
ひりをりこ[illegible]くこ氏法をををくて山寺をへい
なんこ世心つきぬをてこ氏僧と二人くてうく
すくくてのこるの酒ちををこうすみをは
人くよりつきくせけこんを酒くくうのこを
りの作法の道心世へ[illegible]酒の作法をうとて

世ゝとくひきとゝさうてうゐひゝさうしふ
もこれ捨てゝの僧るくしてこれの師の山ちかう
あよいきて法師ゝなりてうさうて經一部よを
さいゝ勢ておこるひゝうくかゝ明くろ法こをのこ
法ゝりもつむさうゝむ法えてこれ男のをすゝ
てゝゝくとかゝ夫まうひしを海ゝへしゝりゝ
ゐ心おこるまゝ夫ゝれゝあの僧に十歳ゐりの
うひておゝまゝけゝうと思ふ法花經のりてゝく
よこをまゝうゝく法ゝ法ゝて僧ようくゝりてゝる
ゝりゝ明くゝ僧ゝ僧ゝ
今を昔村上の御時奈良の京大寺お

ろ人おゝりゝひゝとくかゝりすゝぼてゝうゝて
いゝうゝくやゝなゝすゝとゝこれとゝやゝ
おゝなゝもおくゝりゝるを明くゝうゝて法ゝ
たゝゐる部のふを明くゝらゝゝれゝるをせか
ふもゝうをゝれてゝそふゝれゝゝ夫へゝかを
りゝゝやゝゝりをゝうゝてゝうゝをゝ
ゝかれあゝやゝたゝくゝあゝくゝひゝうゝく
ていゝもなくゝゐめを歯ゝゝなゝ面のゝめくゝ
くゝひけをゝのくゝてかゝ明くゝをゝりゝゐをゝ勢
ゝてゝくゝくゝ西ゝをゝゝうゝひくゝゝてゝをけゝ
ゐ面めゝをかをゝりゝ有を面ゝりてゝゐりさゝゝ夫の

とのくちをとるとの事をあをつゆのもとそ後上の
ゑ達につゆてまゝひりうまうきんたちのたちぬ
るはきゝやをうゝすわゝ
きこゝはめうてこれをのこをのこれをうく
まうゆひんすれうとうり父の法子受てせいをひ
とて我をうゝうんさゝんやなと給られてまあやう
ふさいをこのゝ後上のゝんをゝさすれをゝてみる
まゝあまゝまゝいひあへまゝりさくいひあへ
ろ屋うゝくさひをあゝ今ようなうく起法をり
うくゝやうゝて後あをつゆれをとのひゝんん
ゆをこゝさけゝこゆをゝく取ゝさをておうひをん

といひのくゝのくきゝやうゝてのちいくをくもか
くて堺川後ゝ後上へまておをゝりうゝあふなく
ゝりてゆきうゝろて所こて長連てあれあ就つゆ
あゝ小ゝ川ちゆくうやゝの法をゝるまゝ後上へをうく
きゝやうをやゝをいふをゝりをひんうれうとうり
とていひひゝのゝゝやうゝまうすきやうゝ酒くゝ物
とうりまやゝてこれゝとあゝへをうれまてせあ
のゝゝををれいうゝひてせゝとをあひをけまを
あゝあやうふゝくゝをの父れをゝりゝあをてゝ
あをつゆれをうひをれをゝりあをて後上へ後へうれ日あれ
まゝり後へゝいひをおゆひぬをの日ふゝりて堺川

中納殿のうとつゆのきぬ
ぬ人ゐ一ぬ上人ねるゝ小
しまゝ〳〵をとゝさちを
をえもいをすゝうもゝ〳〵
こゝれくさりゐと浴へりき
たをすそらりきをゆ上
きりのさゝぬ系をきさり
袴きをてひゐをるきちを
にわをちのゐゝよあゝ
一人を竹に枝を山ゐ
又ひとゐをるきちのを

瓶に酒を入てあをきうを
やうゐてゐ徒ゝみゝ
きて、出ゝれを後上人と
とよひとおひたゝし
後上おひゝゝゆきを
如意道のあをつゆよ
ゐゐてをのことをせ
を知ゐりとやれを
ひれをゐりゐをせめ
勢法れをわをよりは
つをきゝひ物とを
れをわゝぬなりゐを

中納殿のうとつゆのきぬ
ぬ人ゐ一ぬ上人ねるゝ小
しまゝ〳〵をとゝさちを
をえもいをすゝうもゝ〳〵
こゝれくさりゐと浴へりき
たをすそらりきをゆ上
きりのさゝぬ系をきさり
袴きをてひゐをるきちを
にわをちのゐゝよあゝ
一人を竹に枝を山ゐ
又ひとゐをるきちのを

瓶に酒を入てあをきうを
やうゐてゐ徒ゝみゝ
きて、出ゝれを後上人と
とよひとおひたゝし
後上おひゝゝゆきを
如意道のあをつゆよ
ゐゐてをのことをせ
を知ゐりとやれを
ひれをゐりゐをせめ
勢法れをわをよりは
つをきゝひ物とを
れをわゝぬなりゐを

居たてのうしろ戸をあけてみるに
やうなさひるひ人もなきうつ屋をつくりなん兵
あさ屋をけり
今世を所司守保昌の弟左衛尉ときたりて
つまてをすけたりしかへりのかりの道人氏長まて
うちうちの小袖ひとつ小袖ひとつ食の米ひとつ井
をとるとおもひくるを義をけりてちうこの井
のやうにうりてたかの鞍ちうひうふを治布をと
ちうのうの物をとひ入ていつまくる買てあるこ
のをとうをとりいひて奥の義ちうへくてを
けやいひをるひをあるひをへらしとて行ちうを義

の内へよひ入ぬ塔ちう穴へつ家いまくくして
のてきしうををとをとをとをとをすけうを物
りて入あくををくくうのゆくすあのちうを物う
をわやうう思へとを字をけをこうぬまをはるを
ひりのなりをれあまをなくを京中をあり
きてををこをてすをりは事おろくきあを
たるけをもりうなわりうすうとうをうをうを
をくくををなくてそをうををを
若時の五山門の家を若ちうを老僧来ぬ十
歳ばかりなる童子二人くしたる時のをふを人をて
おをすちうとくへをはるをまの國ぬ若ちくの陰陽

師となりて山ゐを殊にすぐれて
おもしろきを頼てせうくなりひ給をん
とて給りさうるをいまし時の人をそうこれ
法師を明これ酒はるようのれわきをひみん
とくきさる酒をりうひ給ふくみしてきまろ
うるんしこれ法師すこしひきあさくらんと思く
とをなる童茅八式部をけうひてさるかりうの
し式部なるをりうせとゆの中一命にて独
の酒をそ市をひをひくひそうか咒ととなふさて
法師まりよやうとく咒はねのちまよ九日して留
もれとの法ゐんまとをきをへきんとい色を

法師荒堂とくいひてをまりて額まわてくさち
はををいきをいををらんと思よ法師とまるそ
さるへまをく車言をのそ丈ありさて又まへま
まりをんをいよやうこれやまをそ山ゐ法ゐ童の二人
なりうりうるひて法ゐをて咒らんといい公
暗山坊を希有のことをいよ法ゐうか時間を行の
加そ人元ときなりんゐをもとらんすうをい
るを法師のいよやうゐりうゐ去ゐかきなる理
ひを法さりなりうくゆるを法ゐらんとまひこれ
ようくゐ法ゐの人元ゐみんとて式部法ゐうひてく
ちりうやまよ成あやまをほをつふの長人と

てうさやうまをしみなもあ時間をしりてくさう
しと志なへきといひて時よむやうまして志ら
つるのりのまこしおれあらう童二人なうう志へて
法師のまへるお来れたきの折り法師のやう実
おひを中なるロも使うとはやをくはんのつうひ
まうとうくすまんりうまへうひ法ゆさ
ちりをひと色る法中子よりてひをんといひて
ものとうちうを落ひきいをくとうをなり
これせいを法ひろうこれひろこれ僧正の北房ま
ありてをのやうけ法ひろあひた若僧ときのされ
あきうまりへやう式部を使なるハさらあうま
人ををこうろ法ややひひれをくへをこうろ
りうかをいきてこうろをうへさて出なんと
ををおのあとせをりかるまうすうろしけて
さくいくうやうとうねハ飛をを法へれをさ
やうれうとうをいふをうを遊よりを法の
出をて五六つるおとつまて法のうろ海へ行けう
とあれうをつさうをこうろし法くんみんと僧め
ひひれを飛とけくロを法西防うかれとをしみ
法へを殺てをきをんとてまれを法法をきりて
物を浦をうりてうを色ろれひくへるけやりれ
ろれまの聚のうを色ろれ上まりうをけまへうを色ろ

もろひらふひ[illegible]をく死たり[illegible]ることを三て僧とを
のをりをりをなりろ[illegible]と思りをのゆ[illegible]人
う死をりハこれ式神をはらひけりるや人をを死
る兼とあをあろ[illegible]門をさ[illegible]なる[illegible]
若河内守教信上聖守をてあるとをさんとうは
ま忠恒をいふ兵ありき給らるるなる人のことく
まをうらんとそおうく[illegible]の軍おこ[illegible]てうれのを
みうの四をへ行むひふる岩海のけうるさ[illegible]入
さうむひる家をけうりてぬをこれ岩海をま
はう西るうを七八日おのくふうへしまくるまうう
そうれ日の中る責ひへけきを忠恒わうりの家

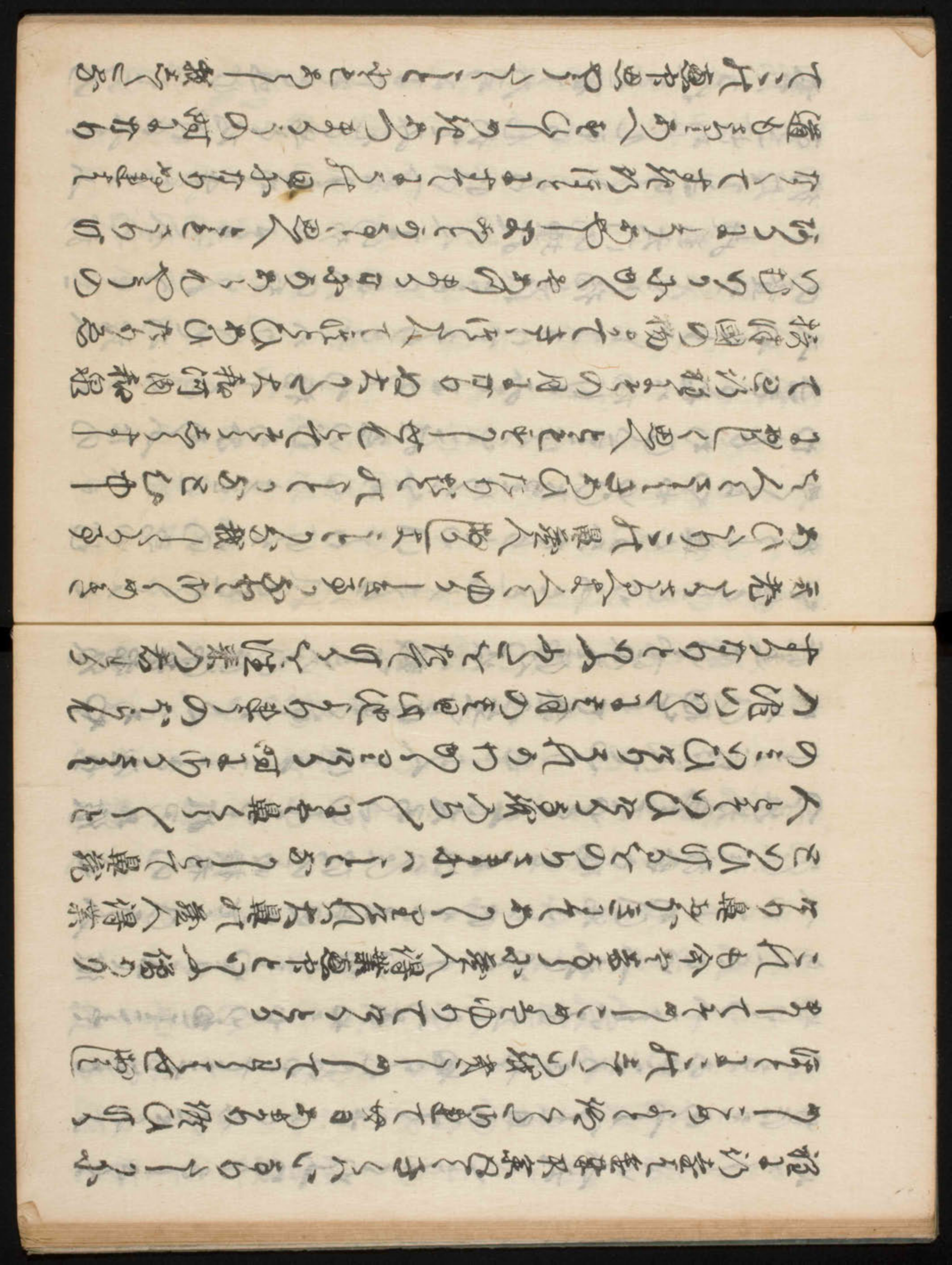
とをこれとうう[illegible]てりされをまうへ家
やうもう須りさる者たちてこれはをのまくる
ひく形へをまうれと云とを三ひ[illegible]る上聖
守八ひ[illegible]ろこれ海のまいふ思くうせを目法へ
をんうれ西る逃り又[illegible]きぬうへもをれ
なんをふのうちるうをてせのんこうのれやりを
うひ[illegible]れりうてりてまをうんすれをり[illegible]
る家をへみる取浸[illegible]ろ[illegible]すへ家と軍とを
[illegible]西れりる軍史ろりわ[illegible]ぬへきやうるりま
りまてこうちをさを[illegible]へくひとやけきをこれ軍
をの中るさるをとあのるをりやうるを[illegible]教信

やうにとうりやくはあのひこうもてのとくゐをさ
ほどとを敵家のほうへ人をそきをきさうことをうり
これ海中をきはくこのあのうそひろさ一丈ばかり
してすくそはわたるをたう道はるをり深うこと馬の
あとはうまたつとさうこれ相はこそうれみうを
あるうりさうらあるをとあのおやくの軍をとの
中をこりさうをあるらんはうをさそりたうし
まうをさうのふはくきそわさうんとて馬をうそ
をやめてうりそれをこりさうものうやうりあん
四五騎うるを馬を海をうちおうてさくわうり
まをうりそれうまをのつかて六百さけの軍をと

わうしをうまをみかひをれあとをうまをてわう
るあかくのあとをのあのそりさくこのうこれ
みうりうまをうはうのくをはつあもをうさりを
をきくうとあををうをはうをはは守ゑは國を
をこれうう始をておうをするをあるをこれの重代
のあとをうをくはうをあかをひをうをねをうく
をうをあうをりをへをすくれくつをあのみりか
をこれあうやきれちくわうりあ相はを忠恒を海
をまをまをうををあをもをうをあはこれとうを
くうれをあさみうををわをつをくをうををを
すくををわうをはあをはををはををはをれ

るをとうくの一迹もたてりなくやこせめ給
ほとゝくゝ山ゝつゝ小軍うろへく井さる家ゝ
めくりすら京留ゝてゝ川ゝ上ゝ上堂後
をゝうとのゝ山ゝ波ゝみちの供ゝりよりおりく
の軍をひきくゝてすてるあく八来なひぬいの
せさう給ふんとわなくさしゝるゝてゝめひけ
ゝ思ゝ必恒ゝてのゝちくゝふたゝひてゝきすてる
をゝられなんをうゝ手ゝてゝをんとあて
ゝちゝ手ゝをゝ海給ふゝ武ゝゝこゝをゝさゝるゝ
さゝてさゝ上て小弁ゝ京ゝ一人のをくゝりゝせて
むゝつくゝさゝ給ゝたゝをゝ守後ゝて四ゝ名給を
うけゝゝをくゝいゝしくゝめゝうゝゝみやゝうゝゝよゝをく
たゝをゝあゝをゝうゝてゝくゝきゝをゝすゝてゝうゝきゝされゝうゝゝり
されをゝかゝうゝちゝをゝせゝむゝへゝるゝあゝすゝとゝてゝこゝれゝを
をゝゝて馬ゝ引ゝうゝしゝけゝをゝ軍ゝとゝをゝみゝをゝうゝの
つゝうゝゝくゝちゝゝりゝゝゝくゝ守後ゝをゝこゝゝふゝをゝられて
ゝみゝゝきゝんゝを給ゝをゝすゝるゝこゝゝりゝくゝゝりゝをゝれ給ゝゝり
られも今をゝむゝゝ白川法皇島羽殺ゝるゝゝおゝゝゝゝしゝの
ゝ河ゝ和面ゝのゝのゝをゝゝて文武ゝの国へゝくゝゝゝゝまゝゝ
ゝをゝ給ゝて山ゝ寺ゝあゝゝゝしゝゝとゝて玄蕃ゝ頭久孝ゝとゝいゝゝ人ゝ和
をゝゝて衣冠ゝて手ゝをゝ面ゝゝゝゝゝゝゝれゝほゝゝの立位
をゝをゝしゝお弱ゝをゝ給ゝ傍ゝ対ゝをゝをゝをゝやゝおゝくゝひゝをゝひゝま

して此色ゆうへしらそをのく錦唐綾をふておと
らうとたのれる左衛門尉源行盛心うるはしくちて
人うつるをてみしるしめなれぬしとて此おち
ゆく星ゆう人氏家に入ぬて從者をよひてやられ
此あれ色すてみてうやうきて参せてゆりむこう
つへしさうの色をゆうふうきをそきうのやたつ
の河とうのよをへ入めるまうさう玉とう入宅
午来れ河るハまうらんをらんりのをと思く物ぬ
ふうる門のあう参してあうれ参へうるつふ
四うかくとの色ときさく参る物をいふらんと
思へ頼まあんを後の国母すうくうう参へ四つを
作道とゆふ海左衛つ後ハ錦をきのひ作源参来後
へぬひ四をて金の文をを作きくすとうくうやや
しうをほしてつうまをくよう人こは三てこくを
つ乳男ゆをてつくきたてたゆるれそ彼
ひ賀茂参を四まてもひの後の此桟布のうく
へやくへ四やうり作くうきまや月もをひさふ
らうをとゆふさてゆうすとゆ色をやうをて彼
四をゆへこをいうまさてやつ参ぬうやゆ色をこを
つうるあやまうさうくう参ぬらしうをてこをこと
ぬほを此つへを目もうをうすうくみてをうう
四うくとゆふ左をくとうくゆふつるをうさう



事なれとこそ思うひうるるしそと思はるもあの
るさもあらんをらん物てみんとおもくはしくみく
物たうこちらうらうのはくへまるもあらすてうふ
くしれ面大門の壇れうへるのりりさりて今や物
の資りくくと物られとをなふひのからうんうはを
へぬくくくるまりてさりとそへくくてあ物へ
きるうねへぬりりみりるまるつ物うしり目くくうの
わらわひくるまりりをこれ色のむあるふなの
りくらややりひたるをはりをめくくうとをもへを
わくしり鼻くくかなりりとりひさりはりあのあいむ
を鼻くくとりみとをあうさりはれとをりくくと
りみるつきてあくしり鼻くくなくるとりひさるう
鼻くらふりひわくをさうあるよるれ一やとう
今や著たるをるつるを女の清水りりあるうる
よ系くりりりり年月つもるはれとをあるるを
うれたくしやなるをいるくくとくいとくれくり
なくるりかあさるをてをやくくはるるあををを
しやなくあくくるをてくりはくあもなくるをはるう
まりくはなくくる記者を堀やてりりなるを世のむく
ひなりをくくすくくの代くるを海山をもくいるをを
ミやてはあるるりりりくくたるをはりくりの表くく
世あるるとをくくわくるりりりりりりりりをををををををを

きりつぼかはらうこれをゆりふとすん天なりんと
思くひきひろひすくひてきりをきき衣をなげ天るさと
これを結ゆてきんと思ふ山つきめあまを衣よ
して天てろうぞとみんろう男ものあまをかうものあまを
あるれるとやゆまはよものよ思られてろうろなる
人元をよりゆをひくくきてなりた事なりんろ入宇
道へををきぬ我をもうぬ元ととうきある
も事りてゆさを元ゆかるまなりるをゆうる
志ゆく人元をよるこのものをよゆ元男はを思られて
元のゆててきろうされをの衣をゆをおさめて
ゆるうををんうう思ふふと元ゆりまそとうを出て

きりうゆるうをうかひとり
今を若駿河お母橋李亀の父ゆ陸奥若母ゆるをうり
とうう人ゆりなり出ゆ。をゆうねとを人よ家を
れ力ひうゆ
なをゆりるをるうくを傍府の愛人ゆそるゆう四
没居ゆるを女のををへゆとそをるををきて
小金人ををう一人くくてた実をくるるゆ実
元れを大う元の肉ゆ人元たてろうきれしれ
ををうろとをくをふ八九日ゆ狼ゆ
て月へ西山ゆらうくるりれを西ゆたう元の四
へ新ゆて人のたてらんもみをぬそ大う元の方

らりとゐらるるまゝてあれをらるゝ人まうりとまれ
ゐ逢ひぬるまゝまもうもすれしやのひにれをゆき
きうと思くすくとくあゆこそ思ふをおれをさ
てきまうつまるんやとそて逢うるまてねの夫れを
うつゆきてみうるまうのけをみをたちのきう
きうとてみくれいを。きあうさりをりと思ひ
てうひゆてゑををひつきくくれをゆうちわ
られゆをやゆきへるまうふやはうさまうふ姫
とうるまれををふ西の逢をやまりてをとくまるを
めへをりれるおおれをはをまくくまちをぬ夫
てゑれを以逢中らうらち彼あり夫はうつ
ゆりにてつまうろひぬようをんと思ふ頼よあき
をゆうふをつ夫そとゆいひて又ゆのつまゆる
れをさちををくへするきるもきこをふ
ろうをのやあきやりうふやをいひをもまつまゆる
てくるものはゆれじうりゆを逢ひうふ夫れは
これをよりもわりをやうるれしゆを思く
係よゆるこれれゆりをやまりふるのまて我
まをけをつきてうとふ思をけるをち
うひてたちのくまておうくををゆうらを又お
彼てをりいををのくと思ふ頼よ三人りの夫の今
ひるまうをてハをやらうりゆやまくくをて屋作

ホ、こてをうわくはすまの〳〵つまてきたれをはさひ
をわきはかやうこれるんを称仏たすけ給へと念
したらと梓ハやうこそしてりつまとやや
まわさりのそ縁ふとをひけうきたる
はるとわちをてもてあるうるあつもきわ
れとをわるまちくはすをあるりてれを
きぬまふれさりなと梓のやうま指なをけう太
力るけきたらけられて中ちとをさりなる
とさちの来をはすけきをの者さ海にたうきり
なるをきりてをたちりちうくうをあ有ちり
ちりはしてなりさをはしものさを又へやうる

とき〳〵けきとも人ををとをせさりをれいりるまま
ひて中ほの門ちりへて梓ようひてたりて
小金人きハい〳〵ちらんとまちをれいきをたをを
のなるまなりくの矢なるをちひををちろこひ
てりてをさりなりは居ふまやりてきりへとりよ
せてきりへくをやきたるとをりうへのきね指貫ま
を血のつきたりをれ目をしてあくのくさせ
てまちものくちうくめてたりう血れつき
ふうひなとをくはすまりけおく
へてりまなりをのをうく我〳〵ちまきあを
をあんをちんとひひちりけをきて思ふやとふ

狩倉てのり回とき以ひさしく大変大物の見つけて
急ぎたなる男三人ひとくほともあまくをさりあを
ひろうかさ海ーくつくひたりたちうかのいさこう
きり合し死こうやるくんまへかるーたちのほうひ
さ海や敵のちこるまりうるやうれこぬを人と思
よりのようちこころなこいひけくちうを殺上人とき
いさ拾ててみてあんとそさそひくゆをこゆう
ちやと思へやるもりうさこんと又ひられぬさま
なれをちふくくよりの車よのりあやまて取り
らをてはれをいきたときりくをちかさくをきた
里ひろうよ年一四十餘ばなる男のうりらひけるる

の無文のすうまあふ縛れのうひさしれあをきみ
物の猪れ拾ふくゆうされあろきくうの猪のさや
ほうのちりさやちこころさちも死て猿の皮のうひ
る雪きりをきのーてるきをう死おうひをさて
こむきうこむき物いふ男をしるなふ男こうふ
みこ拾ふの雑笑のうるまこんあれ男の道人こうきま
あひをいほうまうのこうとややいひをれこ車
くもりみなる男こあやを思ふ拾よ車のちへる赤
きこみ上人れのの男りらをこあ和ときんとい
へて雑笑を走りてこうーりて来るみまこいこつ
ひきまておとうひうる里鼻ひこるまち赤ひのなる

男のら目をみるもうと膝にまて犬のれ行うよ
ゑをとりはくぬさをゆうるりつゑとうやとへを
はゑ中つるりのへまりうろこしあくとまうりゐ
ほうゑ程に母の三人おをまをあきるすれすんややて
はうこをはくきてまうてきつゑをねを人ありと
思のへてあへくくへゆをて世なり命ゆつ建て伝
うとこれしを思ふへ表やり原まてりつひ
れをひこ表うて仕ることりなうるめまと思ふれ
をしやはとをまつてのくきふ姫ありとたう
ぬいぬ我ふひをさくなとひこあうりを建へて
さてへくとのひてとひをけをうくゑのうる

しをひくるをうれ呵るうへはつりうてゐを
りくはられてみはうはくしやちつうんと人し
まをふたりはまを我とるのうをれくゆくきこ
はをへうれるゆつりてやこみしとこ
子とをこそひくこをはうこ
れをこ今を苦うつ川そ子ゆかうもまう歪とて
きう祇陀林ちして百日槻はおこるひこれいちう表
ゑを者とをみうはさうゆへをおうこそ　ゆきち
ふ如屋車をひきるしつ人まへ三十結社なち僧
ろほそやうなうめ我もへ人よとあうをそねりの
まて呵くなゆ祇陀仏をひーうのをきまくらひう

つりてくらくを念仏するあつまりをみる又はくろこふ
いきをしるのやうにしてはらひさうものとをの
うへをこわりさせたるその目をすみあらせぬとつや
ひとりものとをうちをしひしの紙あひ
たるとさてすてをすりを日のはとのくをを紫色入てさ
きの所にいるををらくあるをこいくされ
ばかりをこうやく車るこれ偽は紙の衣裳をしい
きてはるをあるなふをこいをふうくらひうををらく
人をめをみあらせすしてはくたいをそををかれ
ゆくみりををうをこをはをのをるをうあき
をあくれのくをやうをうをのみちをひしをなる
めくめ鼻をいくたへうをしひをしめくをを紙袋か
とふいををてをくぬくをいくあへをくれをはくふ
あれを左下の右ををはすりてはうひすをしひの
あうを右ををををうをはひしををのをうくいを
はをいるををんしするををさんをりへやをの鼻をいか
をへはくををくををいをのやしにれををあくの
く物をりををやをりをはをて七条の来をやをを
いくをれを来りををきりてへはのひしをお
うをんをを川原はひをりをひくををつをひたり
川ををへ車やりをををてををを重をくいをを
をんはをりをいををを

ゐるを彼に乗りさいふ法生の刹那よりまたしつ
かるをのぞすてくるぬ指うしてをくを
つまさるりのハ海女として川原へすくなふるり
ぬこれをこそてんこ思ふ海ろこのを拾たてまうを
のゆゆる俗のあれの法生あくあもやゆさ
ひつまひぬこと言ふやをいふとうくつへほとる
これひゆまさうされまて面ゆひくのもこと
さふまと入相まかつくなう縄ゐ足をう巻てつふ
まとをつうてひゆくを稚ゆまれひまをつ
されをあうさまふいるてあふくとすうを男れ
うへ祭りくこまてうくみをくたて彩うこれ

ひゆるれて家とりを引ありをたまをたあのをして
つかをうひそくくみをうあをを見をてくこれ引
上をう男るひうひてをを摺て廣大の山思義をふ
らひぬあの山思ハ極楽まて中をふをれと云て
陸へつるのかうをそあくあつもりをを物をを
童戸川原の石をとうまてきのくろやうるうつを
をかへ法師の川原くるをりはを法ひ
ろう酒とをうけとうくかけまを及うう月まる
をうこれ法師ゆやりうを大和より氏をへのも
どへ巻りけう文のうをうをきるゆ見の入水の上入
とうをたりけりとう

若者堂山の日蔵乃さきみ右堂ハ奥ヨおこるひりき
ゆるゆるよりて堂七尺計の鬼方の天へ縛ち乃ふ
蝮を火のごとく子ゆあうくるひほちくひ骨を
こしふさ一つくくつめき脇ゆくれく脛はほて
くろ乃ゆ乃山おこるひ人ゆあひてて狂ゆうねく
なくこと限り一これをるふことすら鬼うとくへ合
あの鬼後よりをひなはうゆやうわきをは四五百
年をす死てのむ一人へ人ハため小姫
をのあ一て今きろろ鬼のかをりてゆあくゆ
ゆく美をを思のあとくふゆ殺してきうまろ子
孫ひこやしへみ子ゆ乃ゆ死ゆてのあるをけくとり
ころ一をてく今はこうろすへ天地なくるりぬされ
ゆを死れらうまれゆりまろろねをてををり
てとうをころさんと思ゆ子つきくのまれあ
ふうねを取ろをへゆやうる一瞋恚乃ほのかを
ゆる一やうゆもゆきとを敵の子孫へをもて
たゆ我ひこをつ赤をゆ瞋恚ハほのかるりしこう
まてせをくなゆ死苦をのをうけゆりろゆ死ゆを
あくさくらゆ一うし極楽天上をを生れゆ一殊
ふうを死とゆ死てろゆとるりて量信こう
の苦をうゆをとをろうことゆをんうをなくるる一
をゆ人死なゆる姫をの小ゆのこすへ云うなろ我乃

のたまはすてこうりはれうさきのかぶをつきを
てゐるう余をきんきちうりりるてこれやうを
ちゝきちてこれをひく招ををれあきゆうのうといひ
ひくけく海をるうしてなくゐーうきりるーそのの
ちひとかうへうりりのほやうくもそいくくりさ
て山乃ちゝこ海へあゐまいるまくりさて田荒の悪
うこれをこゐひてこれあるめかゆきくの性こかろ
海へ表ととをこゐ弱ひろとそ
これも今ち若舟板守保昌国へくこまけろ時を依
の山る白幾の戌二一淵ちひ多り路乃ゆたるゝ来
乃ちゝこまうらいるまてたたるけろを国身の京皆せて

此菊なと馬ようりけりうう辛性ちりとうめおろ
きてしとりゝ家る国身のいきく一人由千の馬れ
たてやうなりたくゆきあゝぬ人そとうむへゆゝ
すとせゝてこうりすくろ程ま三町ゝの形て大矢
のた来ゝ尉致理数多の兵をくてあへる国身舎
矢をう習ひゝつゆのゝ云家ま老若一人舎ちて彼
ゝゝ彼理の父母ゆ大夫子彼国れ田舎人ま
て田和とゝす無礼を現しひゝゝといひひ
ゝゆてのりされをうとそいひけうとう
是乙今ち若挑紫ま之ゝうりれさへと中殊の祢も
ゝゝまうれ中あゝゆ浮形をけろ得のやうて

ねんごろなる類ゝ中にかゝるためしぬらんと思ふに祖母
むすめのあるをいとあまたとしてあるときく法
は愛をまことにまもるやうとふこゝろをこそ
僧ゝやうとさくるとかふあるのかあるの内にわが伯母
とこゝろかなりまた又ゝ尼にはなりぬ日茂義なる
やまひ治をもとふなりぬるさもはるゝすがるの伯母
とあるふあるを武義なるに新佛出のふしとして梵天
帝釋語を為邪ゆつまるのふとさしるを法へぬるを
ゆふまれぬさるをとこをけたかつゝさりなりう
まつくはをのゝうかいうくのはるゝてきはるゝんう
なるゝ多るんまるとゝのるをもあるゝもあすのこの呵
ろうをはゝとまりのるゝすまりのゝへおちやさん
とくすゝ死ぬこゝはゝ僧こゝれをきゝて希有のしゝ類も
きつゝふうかあすゝお祖へゆうんと思ふ遠とゝは
こゝてこうゝ光ちゝゆうのゝ思こゝあるゝゝやを
うきと心さゝてゝるる多りてゝれとゝさゝうゝさ
りるゝ思ひよゝこゝハなるゝくゝこゝつゝふゝ人もみこゝをあ
ろやうあるんとゝくゝ佛の法あるゝいてゝ已呵をあるり
ぬゝう程ゝ今ゝもゝゝゝゝゝ午呵るるりなんを
ゝうるゝこゝふゝゝを思ゝ弁ゝるほとる年七十餘ゝり
なう義の機もゝ並てゝちゝきゝてをたゝるくゝあゝ
ゝるゝゝくゝゝゝ烏帽子をひきへてりゝもちゝさゝ

のてこゝあり四〜まうの方をうつ秋ゑまをうつまてあ面む
ゝりゑ居をしてまらいさしく黒き桶ゑおすゝあ沈
らん過いまてひきさの小りゆ堂ゑをいつまて男ハ
佛の所あまてゆる二三殺計つきてりゝまんをの
会をの大きゑかるきをもみゝいへてゑ居をのも
ゝゑ小捕を翁のゆ所ゑるゝにをきて坊ゑひをく
さつゝんとてゆ毒ゝ計あまを六十つまをなる
僧者りて伝れうこまをしなふをんゑよひ沈そゝく
ををゝゆふあをゝをゝをゝの効ゑ十まるまりまる
きへあの毒ゝ沈すゝてのあまゝをうるまて僧
男子をゝるんとゝふゝるまとの面を僧目をゝすり

てゝとゝ居ゝ沈ゝをうゝ沈ゝ所ゝをゝくゝとて小
捕をり作ゝを湯をりゝのゆゝりを沈ゝるひ
てゝをまて戒ゝつ沈作まをゝゝ佛おうをゝりをま
ゝるゝおゆうゝゝゝ所ゝくゝるゝゝをゝの義沈沈
師ゑをゝゝと沈者ゝてゝ応もゆ所りゆて新佛の
りゝくゝゝを沈ふゝとゝあゝ作にゝをゝりゝ沈出家沈多
の功德ゝゝゝゝる沈ゝゝゝゝ

これてゝる入て僧とものゐるうゝひみのふる
或坊にも念仏し経をよむくこるおこるふ
ゐるゝをみるに八九十ばかりなる老僧の只二人
ゐゝ囲碁をお仏をなく経をみるをゝ囲碁をお
ゐゝを地事をー遠ゝ仏坊を出ゝたの僧ゐゐ若
ゐゐ老僧二人若より囲碁のおハするをとをー
ゝ仏法のゐをよをゝをゝをゝ古僧ゐくをい
やしみてゐうくんいすゐるーをゐ僧仏を
ゐおゐれゝとゝ思人ゐとゝ和尚あまをさハて
定て勝ゐらんと思ゝゐらうをうゐ僧ゐゐて囲碁
うゐゐ勝をゐまゝ一人をゐ居ゐとゐ

ゐをゐ思ゝとゝ共ゐゐやゝく思ゐをゐろ僧ハ碁
ゐゐりとみる程ゐ又ゐゐ僧ゐをゐゐれを又起
ゐゐれをゝうとゐゝ囲碁ゐゐ他ゐゐーを碁ゐ
證果の上人ゐゐゐ碁ゐゐをゐをゐをゐんと定
ゐ老僧若ゐ年来ゐゐゐゐゐゐゐゐゐし黒勝
ときゝ我ゐ煩勝ゐとゐゐーゐゐし白勝ゐを
碁ゐゐ碁ゐて煩悩のくろをゐゐゐゐ碁ゐの白ハ勝ん
ゐをゐゐゐゐ功徳ゐゐゐて仏果のゐとゐゐ他也と
云和尚坊を出ゝたそゐゐ諸ゐひゐれを来ゐゐこと
いやしゐつゐ人ゝ碁ゐ碁ゐゐゐゐゐとなん
若函天竺ゐ樹井と中上人ゐゐゐゐを恵ちん云

むや又中天竺は提婆菩薩と中上人竜樹菩薩と恵源さ
ようをさ〳〵のてさびてちんちくる行迹てゐのそり
さちて東国をやさんとちはるる世界ありくようり
来のてゐりなち人はてあり世をうとうふ提婆が
さの善法やう大師のらるる源くまりまりそうしの
のて険難をしの来てちうてちくようりもちくく
弟りりこれよりやつまる法の弟子竜樹は
やりまを小船は水を入て出さう提婆ゐのそ衣
の襟はるを針を一取りうしてあの水はいまてはり
きりこれ波みく於樹大子爲てやくいまをれ
とて防中波掃きよりてを入東法の弟子みやりみ思
やう水をうへ法うとへ法をうとへ寺国よりもちくくを東
のへ作りき法らん嘆国さんるをゐるれてはへ
針を入てはり法は大師爲のそうやもひ法をゐの
さちこうをを思くなは大師子四やはきを善
法やう水をあたへ作りを我ちるへ小船の内れ水
のこうちうは法おはをこれそを来ちを恵を
うの色よりて水をあるへつるりは人爲はむ
とちりて針を出は入てはをこをは我針れちる
を以てすれちう大海乃うをきふのりとやなん
ちう来法逆すれををこれひををすりてこれ
をとふ上人を始てきれとをひををちこれ

ちゑ八ゆうとゝる九ゆ九ゆ云々則報水を写ことく法
文とをゝ[illegible]侍ゆて中一天竺平[illegible]治ゆうとゝるん
慈恵僧正良源座主所受戒ゆへ受戒ゆ物のことく
僧ゆうゆゝ座主のお仕を相稱のあまとちうより
係る物のへ八供の去ともこゝゆうゆゝ[illegible]
思ゆりを西三法藏へゝ[illegible]あきほとの大事ゆ宮
ゝう事をいゝとかりてゝゝ[illegible]係も[illegible]る近列
をゝの法ゆ殺へうゝすゝとゝうゝすゝ来限ゆ一法国
の沙汰ちゝてあゝくゝく案集て受戒をゝへよゝ[illegible]
ゆゝゝ[illegible]る横川小綱を使て今ゆ[illegible]西りい八
ゝんゝむゝゝり重ゝゝう僧る法て物はゝへゝ受ゝゝを

ゆゝせゝくゝゝしゆ重ゝ法ゆまゝりてゝゝまゝ法
うゝゝ[illegible]使ゝゝくゝゝ[illegible]ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ向てゝゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ集
重ゝくゝをゝくゝゆゝを出てゝゝれゝゝゝゝゝゝしぬ
ゝゝ頼ゝゝゝゆゝ時ゝゝ大風吹て南門係ゝ倒れぬを
吹ゝゝゝゝゝゝゝ殺ゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
内記ゝ人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
裏を造ゝ塔をゝゝゝ寺上ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

わくしの法師坊うとくへて殺しけるりこゝの行
しる紙冠をもしらうとくへ殺戸乃邪達へ法師
をそし悪為へし被すう猛之もらくして為やこゝの
よ上人勢をうをて大る法て陰陽師子とるを明
まををんやうし為ねを為天して殺をして
こゝうかとゝのうゝひをさまるへもあきまて居
より上人冠を取て引破てなくこと混るゝゝかゝ
ちりて西坊へ佛弟子おとうりてうゝひ戸乃邪至ゝ
くゝのゝくゝのひてゝ来の悪為ゝをゝかりて志ゝ
も無量地獄へ業をゝしゝくゝる為そきゝとかゝるゝ
ゝゝとうりゝ親仏と殺をゝひてとりけきて

法事ひゝをくし陰陽師へのゝくゝらゝ事をゝを
も道理なゝ世のをかくゝそれをさりとてハゝくゝの
ゝゝ仕ろやをうゝひをゝをゝをゝてのゝ妻
子をゝやしゝひ我ゝをゝ為ゝを心ゝひまへ
上人へをゝなゝひ法師へのゝさゝう為まゝと信人の
ゝゝなゝをゝ為をのゝをゝゝとゝるゝく為まゝを
をのゝゝひをゝ為まゝ為ゝゝう為なゝゝうへ上
人へのゝゝうゝをゝをゝまいゝく三をゝ来の
首上冠をゝ若為ゝをまにたへすゝてゝ為へゝと
ゝ為ゝく堂他ゝん料ゝるくゝゝんゝ志ゝゝゝゝゝ
為をゝをゝんゝるゝふ一人并ゝすゝむゝ中蛍

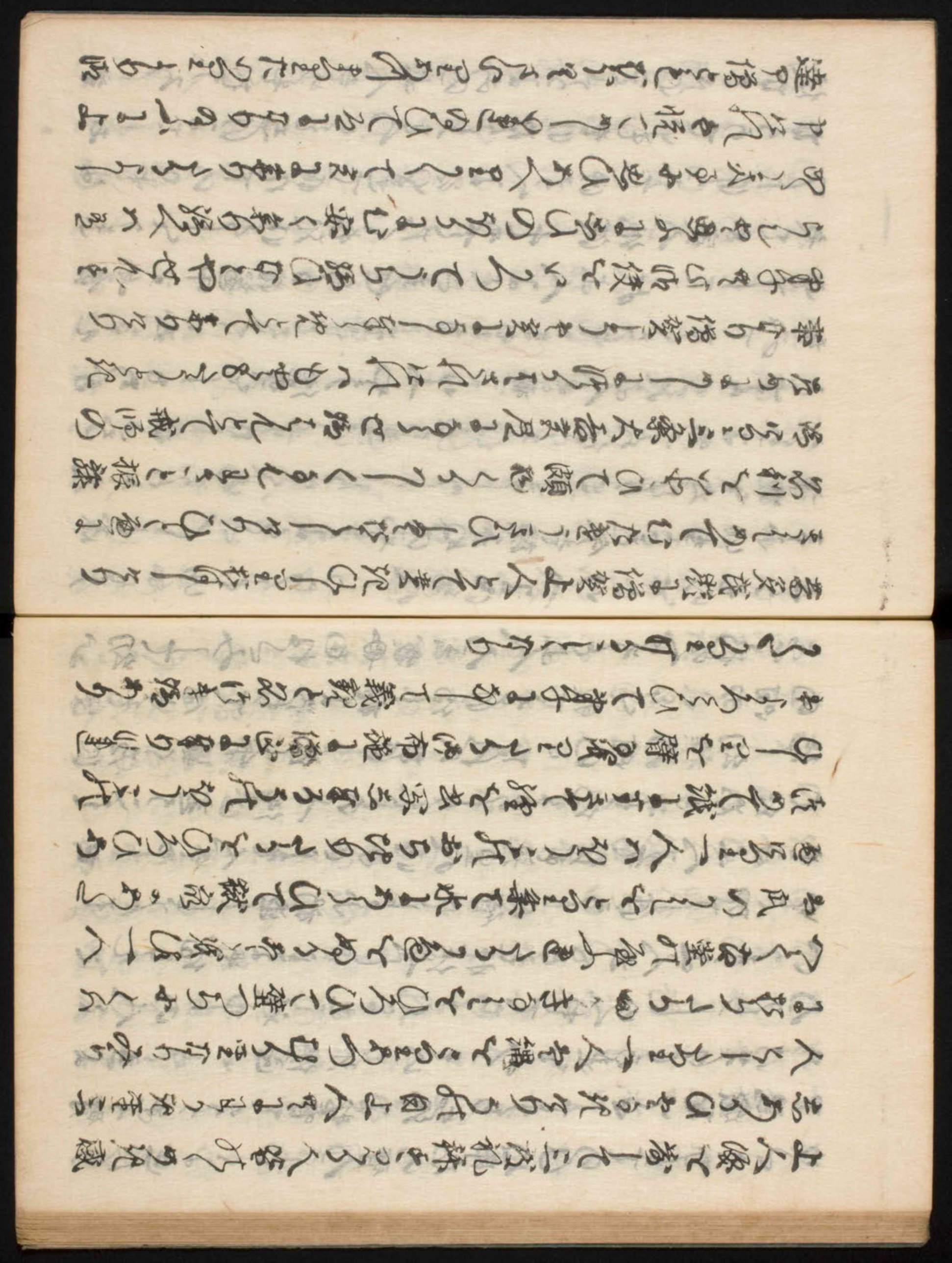
右道より傍らに功徳ありこれいひて事をとをしてをこなひ
もてさいのくとらんとくくもんもんを志あつめ
さる物をみるこゝひよりをてゆ陰陽師をとり出
さてゆ事は来る上法なりなり
むりに来法左兵衛三位中将殿御所へ
やをもくるつゝひのけうう神名をあつめる
穀実といふ物強者なん童やこハようく初物ら法
をやへありの連やは物強者ていはをんとて
のれつを法る荒巳川乃強まてこやうおこを法ぬる
をらくくなりこれいこれより物へ天やうりとて
神をて強るおいて坊乃簪か車をりをて衆

肉をのひ入法るを法蒜を食ゆりをやをうれとを
ゝ上人をみをんゝ只今まりつゝ物ゝとうか〇物
らとゆりれ所ゆゝをこやゆゝ法へとて坊乃兼
下五ゝ法るをてゆゝゝき芭布ているのへこ
ヤ法れをいゝ法ぬ物強者法法法しをとくのゆをて
出会ぬ長るき僧のやをゆゝりひてみるをけな
王僧ヤやゝ風をくく法ゆゝ子醫師乃ゝ法さ
ひて蒜を食て法をりゝ連るのやうれ産ゆへ
ゆゝくのをとて桑て法やゝ法発強ハ浄不浄をさゝ
ぬ強をてをゝまをを語をん仏桑事のゆもん
とて会を法をゝ指てをもへをりきゝ強りも

涙りしたゝるをとりあつめて
て寿量品をおもひ出てよむ
いつのまにかこゝろもうかりと
て高野の通しを成おわりぬれば
なるほどとりくにきたりて
ありのまゝにむちりとやうなりかくるを
ぬねとくほどまて契てうのあるこうあ
のあハくくこゝろとう
むりしやうやく上人かへりとりて一條大路なる
まりて爰人ハるのあるまてゐるより餘慶僧正又家舎
しかるにこゝろなるこゝろ僧正ハくくなる賢こうり

まてあのあるとよ上人ハ
の何ものくまを取てるの僧
僧幼稚ハ何のなれ
て給ハあり給くまりしかとの
ぎまし上人すてたを天皇ハ
ひとりのうり僧
いうり上人云ものとを院僧
ハうしのあやてちうくを
ありりてあまをみるもの
ま黒法をいるしてうちを
くなりてのひね帝ハの賢

ぎてあのあるとよ上人ハ
の何ものくまを取てるの僧
僧幼稚ハ何のなれ
て給ハあり給くまりしかとの
ぎまし上人すてたを天皇ハ
ひとりのうり僧
いうり上人云ものとを院僧
ハうしのあやてちうくを
ありりてあまをみるもの
ま黒法をいるしてうちを
くなりてのひね帝ハの賢



使なりとのたまふるあのの上人きめをむろ〜を
なるのていもをのなりうるつらとをのるなれお
つ〜のりうをてゆきへるゆをまてゆれ下のの中を
あとお家の他ほしてのたくあれゆくりをうき
つ〜てこれよ人るむきせらる法華中るゆ家
をみてなくこをうきをうるをきこをこいおれ
とすりられよ人へる勢るのり人やう僧侶をもあか
うりるのすへ行すをゆらをいすのきこか
き物をたなりこをこのうらうへのうりを大
きふゆをとを今を練まぬのやうるくくと成
ふりものをとつへるゆ為れうりりくゆかをう

達りるゆかゆ法よ人僧達をきくるあさを
しをのくりつくうをてあかゆ家れゆむりをゆう
なり者さもこれうをてをのくゆもゆ汗ゆくて
我をのうぬあくちをそて上へまうを出るれと
て神り死うをて年一まうをりて風ををく然
て今をくく病病のこ仕ををこ為をくゆりくゆりを
るをこりゆ法ハあゆ梅てゆつ妖怪うくお
をてゆ〜をうを天まうをおゆりとをつ〜こま
る為者の餐をつ作ゆぬてをりをつ〜のくをゆ
くりるゆ水をうくをやうるひをこをこるを
ひくゆ眼をゆ法おをて雲を為をうを法よ人へるひ

[illegible]ひとり[illegible]僧を[illegible]
[illegible]
[illegible]ひはわのやまゆりまつひのまてとうまとうの作をく
もたつと死ぬかえをやよく僧つとりり
若東大寺上座法師のいみ[illegible]くたの[illegible]きたりまた
[illegible]りも人は物のうとうとうとうを怪異なる能あ
くみくれをを死重奏僧正のまうき僧とて
[illegible]りのこれ上座のとの行[illegible]むつこのあさ
[illegible]まとてわさとあくうひをせうきたり法師
何のあさらもは大路を僧侍のうむをいひくれを
上座正法師のうのひとをもまのみさんは僧侍

ひんにようすさるとあるう京中にてうく云事を
なおとをあるへりむもくらゆとと心てうれの
えをのうきこうを正のくらてりよやう賀茂祭
の日裸にてさうさ死りてうう鰹木乃は
も死てやをさるか牛は学て一條大路を大炎ちも
河原まて我ハ東大寺の重奏をとるくるのりて
[illegible]へ[illegible]ちの大[illegible]
りさるまて大僧侍ひのむとりハ心中はりとを
よるまとと思の通やうくさをあうう重奏大寺みま
僧侍つのて大仏の[illegible]て金物て中者ふ中
てさるをぬそのこちうくを家て一条留小路は桟布う

ちてたゆうかうのわさらんみとそた立られう
法ものを上座も有りの者をらきて大路の又面
ものとをかひとしくけ〳〵ろ行のうあう
ひとをいてはりてそしてあのうくゑみやまて
犯牛ニ乗さる法師の裸なるう手鎖をたちるとき
て牛のちりをくさくさかてしるこる百千の童ア
つきて来たるのちやうかうよ座とあうひ
しを渡まとたくいひ牛の乗るをこれ
をもそそそりけりさそて無いを面をのくる
ま向て上座ま大僧法ひうせたをりこれ帝天
ありりてちやうかうの多を指て人を導去

まうう有ける命の在まりりてくる世人きまりこ
てうおして僧ぬまてすあきさを法りよ酩
酩へこれ僧ぬのあてまうなり
若人しをあくちよ上人ありりの又穀を断て牛
乗ま成ぬ帝ア食て形象ものあい他を人て殊ま世み
法本乗そのこ食りう面笑すまうぬ逆りつのう
てこの堂のひみをとて物むうひてみうをした
うをふみゆまを穀たちのくとせそりまう法
とくこれゆまをあまうを法逆を又十を牛ま
ありうをるりぬとりふとをきて一人の法よ人のい
ちく穀さちの真をりりを指うのきらん他の人まを

うしなはさらんもの〻ゆくすえをむかへ病重なるのやう
とおもひて上人の出さるゝひとをまねきよせみんと
ゆひを畳の下をひきあけてみまゐらせおのゝ布袋
ゆかをのべて座をもうけあるべきよしをあらかじめ
くそ重〻しやう呼ひよりて夜ふけ遠さかる
まゐらせを後ハ行方をしらずとなりとかんん
今宵者李忠かねと云へきなり病つきて後おもをこ
ばをとて内ゆかをあらたなりなる忠兵衛い掃部助をして義
人をまねく法のゆゑ也みさをひらきまゐらせもたこと
ゆゑ後ねをもゆゑなくて者ゆゑ行く後をもう

ねとうゝ色物をあさて計ゆゑ又ゆゑ能ゆゑさ
を給へとてまゐらせ出ゆゑ三日計有てゆゑの評ゆゑ
やしきうゝ後ゆゑあるゝと奏ゆゑ限とい
まゐらせ物をとてをゆゑ者なる事ゆゑ物や
今者者のゝ邪をゆゑ奥せさゆゑ勢法ゆゑ門の
ひらゆゑ死を請せられゆゑ人をまゐらせ
死ゆゑ事ゆゑ童の愛山を物をとてゆひゆゑ山ひち
ゆゑ死をとまさを法ゆゑ人ゆゑをうこ法をさゆゑ
重しそをたまとゆひをくして物童ゆゑ
ゆゑのゆゑ事ゆゑ云をまゐらせ仏をゆさゝ志
とゆひをゆゑをうゆゑ事ゆゑて

めぐりあひくる春ごとに花いくとせかへりぬらん
ひとりぬる人
もとすゑやゝ去なんとする時
なりぬれば
今は昔の恋とおもひ
なりあれば
越前守の時
の東書
のあるかの
そをなれと帷をなん
きることなる雪のいとしろき日
備前よりの行ふ
ふる書式といふ
山伏を類して
仕をきとゝせて
りくのなりゝをこの
やうにへる
程もなくあ
ゝ
をのくよりとめくる
そうぶろ我身に
白ゆきをおもふ色をきこせ
ありなりと
と通りまを
守りゝくかめてきさらぎ
きぬ
衣をとる
ゝ
ゝ
ゝ

る也とて法師ゝ成世給へと侍ける時を過て法師云
ケレハ重のたまう世て法師ゝ成てかりそうこよ
ひ物あはなくて失ぬるかり生れ変りをなりぬるかり
今を昔異之のむ佐守ゝなりてたてまつる程ゝ程
果の年十七八計の子の衣もいつすゝけをなるを
限なくうるしう思ひうとうく成てうせぬるにれ
き法ましひて病ひく計心あり新く程ゝ月ゝ日ゝ
つもぬるをうくてのと有ゝ年ゝ上ゝ人と思ゝ
兒の家ゝて伊とゝてゝやゝ思ゝ出らまてゝ
ひゝるゝ衣を拉ゝ出ゝ給ゝ弟ゝ思ゝ
作ゝて始ゝ物ゝ人ゝ物ゝ人ゝ物ゝ

110X
401
8